

# 研究報告



# 占領下の人道支援

## —チャンネル諸島を事例として 1944～1945 年—

フィロミーナ・バズィー

チャンネル諸島はフランス北部西海岸のすぐ沖合に位置しているが、歴史的な理由から同諸島はイギリス領土の一部である。チャンネル諸島はガーンジー島とジャージー島並びにオルダニー島、サーク島及びいくつかの極めて小さな無人の島嶼群から成っている。1939年の同諸島の主たる雇用は、観光とそのほとんどが輸出向けの花、ブドウ、メロン及びトマトの温室栽培という集約農業、あるいは開放耕地でのジャガイモ（ジャージー・ポテト）栽培を中心とする農業と純血種の牛を生育する畜産業である。チャンネル諸島の総人口は9万7,000人強だったが、1940年6月の自主的避難後は6万6,000人が残留、その大半は高齢男性、女性及び子どもたちだった。1940年5-6月のフランス陥落後、イギリス軍部は戦略的理由からチャンネル諸島を防衛しないことを決定した<sup>1</sup>。このため、同諸島は第2次大戦中にヨーロッパで唯一ドイツ軍に占領されたイギリス領土となった。これが1944年6月6日のノルマンディー上陸作戦Dデイ及び7月の連合国軍のヨーロッパ大陸内部への進出後の極めて異例な状況を生み出した。チャンネル諸島のドイツ軍守備隊は孤立し、脱出あるいは補給の可能性がなくなった。1944年6月17日、ヒトラーはチャンネル諸島を最後まで防衛せよとの命令を発した<sup>2</sup>。ドイツ軍守備隊は降伏を拒否、最終的に国際赤十字を通じ、さらにはイギリス政府とドイツ軍占領部隊との合意の下で民間人に人道的支援を供与しなければならない事態に至った。

アドルフ・ヒトラーはチャンネル諸島の占領に強い個人的関心を抱き、当初はその後に計画していたイギリス本土占領のモデルとみなしていた。戦争が進展するにつれ、ヒトラーは、連合国軍がヨーロッパ解放作戦を展開する前にも、イギリスが自国領土としての象徴的価値から同諸島を奪還しようとするだろうと考えるようになった。緊急の命令によるチャンネル諸島増援が必要となる可能性は、東部戦線に関する1941年7月19日付のヒトラーの戦争指令第33号にも具体的に触れられていた<sup>3</sup>。ヒトラーの意向を受けて、チャンネル諸島にはドイツ

<sup>1</sup> イギリス軍部の決定については次を参照。Barry Turner, *Outpost of Occupation: How the Channel Islands Survived Nazi Rule 1940-45* (London: Aurum, 2010), pp. 5-19.

<sup>2</sup> George Forty, *Channel Islands at War: a German Perspective* (London: Ian Allen, 1999), p. 9. 同書8-9ページに占領中の主要な出来事についての有益な年表が含まれている。

<sup>3</sup> H.R. Trevor-Roper (ed.), *Hitler's War Directives 1939-1945* (London: Pan [1964] 1966), pp. 139-142.

軍部隊が殺到した。すなわち、1943 年には 4 万人規模の兵力に増強されドイツ陸軍の最大師団となった第 319 歩兵師団である<sup>4</sup>。ジャージー島での人口比率は島民 3 人に対してドイツ軍兵士 1 人、ガーンジー島での人口比率はほぼ 1 対 1 であった。これに対し、占領下のフランスにおいては、占領軍の人口比率はフランス人民間人 120 人に対してドイツ兵約 1 人だった。

ドイツ占領軍の兵員数が多かったため、島民にとって宿泊施設が常に大きな悩みの種であった。占領開始時からドイツ軍将校はホテル、民宿あるいは数多くあった空き家となっている大きな民家に宿泊した。その他の兵員は高い頻度で島民家庭に宿泊したが、多くの場合、受け入れ家庭には洗濯や食事などのサービスに対して対価が支払われていた。しかし、家庭内のプライバシーが失われることや戦争から離れた安全な避難場所という感覚から、一般家庭におけるドイツ軍兵士の存在は大きな不快感をもたらした。一部の島民家庭とドイツ軍兵士の間には、特に幼児がいる家庭では、ある種の友情のようなものが芽生え、食糧や燃料を分かち合うようにもなった。しかし、このような関係は近所の島民だけでなくドイツ占領軍当局に対しても秘密にされた。島民すべてが常に恐れていたことは、ドイツ側の軍事目的に必要であると言う理由から、何の前触れもなく着の身着のまま、家族ととも自宅から強制退去させられることであった。

駐フランス・ドイツ軍民政当局とチャネル諸島の行政は複雑なものだったが、基本的に決定権はチャネル諸島の軍司令官と、一定の状況の下では同司令官の命令を覆せる立場にあるパリにある占領軍司令部の間で分割されていた。ドイツ守備隊は 1944 年 7 月にその後 11 カ月続いた非常事態を宣言、これにより島民は実質的に捕虜となり、餓死の脅威が現実的なものとなった。7 月 22 日、パリにいたドイツ軍民政長官は食糧生産と不可欠なインフラに直接関わっていない島民全員、つまり主として女性及び子どものイギリスへの集団避難をも検討した。しかし、実際にはスイスの国際赤十字に連絡し民間人のための食糧・医療援助を求めることに決定した。1942 年 9 月から 1943 年 2 月にかけて行われたイギリス生まれの島民全員の追放を受けて、民間人の人口は 1944 年 10 月には 6 万 2,000 人に減少していた。この追放は、1941 年末にイラン在住のドイツ人が抑留されたことに対する報復措置として、ヒトラーじきじきの命令で実施された。「政府」—チャネル諸島は独自の文民政府を持っていた—は、子どもと第 1 次大戦でイギリス軍将校として任務についたことのあるすべての男性を含む詳細なリストを作成することを要求された。2,200 人がチャネル諸島からドイツ国内の原始的で質素な環境の捕虜収容所に追放された。これは同諸島のような閉鎖的

<sup>4</sup> 第 319 歩兵師団の規模と構成については以下を参照。Samuel W. Mitcham, *Hitler's Legions: German Order of Battle in World War II* (London: Leo Cooper, 1985), pp. 219-20; Charles Cruickshank, *The German Occupation*, (London: Sutton, [1975] 2004), pp. 190-218.

な地域社会にとって衝撃的な出来事だったが、皮肉なことに、被追放者はチャンネル諸島に残って非常事態を経験した者たちよりも多くの食糧配給と医療を受けることになる。

ドイツは部隊にチャンネル諸島防衛の準備を行わせ、1944 年は豊作だった収穫及び民間人に配分予定だったその他の食糧を没収し、民間人向けの配給は生存できる最低水準にとどめるように指示を出した<sup>5</sup>。しかし、牛乳は占領当初からそうであったように引き続き民間人に分配された。「政府」の最大の懸念事項はドイツ占領軍への反抗的行為や抵抗に対する民間人への懲罰や報復を防止することであった。「政府」は常に、ドイツ軍の反感を買わないようにすることと宿舎、医療品、燃料及び食糧を含めてますます乏しくなってきた資源に対する民間人の必要を満たすことのバランスを取るよう努めていた。こうした趣旨で、「政府」は7月末に民間人に食べ物を提供する共同カフェ及び市民厨房を設置し、これらは非常に限られた食糧備蓄が底を突くまで運営された。市民厨房はジャージー島で9月9日に、ガーンジー島では12月21日に家庭用ガスの供給が止まると不可欠なものとなった。

民間人による記述の多くは非常事態時の困難や苦痛の極めて詳しい内容に触れている。4年間に民間人の大多数は食事制限とカロリー摂取量制限に次第に順応し、かなりの技量と地元に伝わる知識を活用して代替食糧源を見出した。民間人は1944年までにひどい栄養失調状態となっていたが、チャンネル諸島は脚気、ペラグラ、くる病、壊血病などの栄養失調を原因とする病気とは無縁だった。民間医療サービスは感染症抑制に極めて大きな成功を収め、占領中に大きな病気の流行は見られなかった。しかし、ガーンジー島では1942年に感染した奴隷労働者が原因で発疹チフスが発生し、多数のドイツ軍兵士が死亡した<sup>6</sup>。ジャージー島とは対照的に、ガーンジー島、サーク島、小島であるオルダニー島は軍事施設に転換されていた。1939年のオルダニー島の人口は1,500人強で、主要な雇用先は畜産業だったが、占領時にはわずか20人（その大多数は同じ一族であった）が残っていただけだった。代わりに、同島はドイツ守備隊と最大で3,000人に達した奴隷労働者の本拠地となり、強制収容所と捕虜収容所も4棟あった<sup>7</sup>。チャンネル諸島、特にオルダニー島は1942年から1945年にかけてトート機関が奴隷労働者を使って構築した沿岸要塞化システムである、ドイツ大西洋防壁（German Atlantic Wall）の要所であった。ヒトラーの直接命令により、この巨大工業プロジェクトに使用された全資源（鉄鋼及びコンクリート）の12分の1がイギ

<sup>5</sup> Paul Sanders, *The British Channel Islands under German Occupation, 1940-1945* (Jersey: Jersey Heritage Trust, 2005), p. xxvii.

<sup>6</sup> Hazel R. Knowles Smith, *The Changing Face of the Channel Islands Occupation: Record, Memory and Myth* (London Palgrave, 2007), p. 93.

<sup>7</sup> Paul Sanders, *The British Channel Islands under German Occupation 1940-1945* (Jersey: Jersey Heritage Trust, 2005), p. xx; Tom Freeman-Keel, *From Auschwitz to Alderney and Beyond* (London: Seek, 1995).

リスによるあり得べき逆侵攻からチャネル諸島を守るために用いられた<sup>8</sup>。

ドイツ守備隊の非常事態の体験に関する個人の記述は占領に関するドイツの公式文書ともども見当たらないが、これはこうした記録が非常事態末期に燃料として使用されて意図的に破壊されたためである。ドイツ軍司令官と将校たちは残留する兵士に軍務の全面的遂行を命令した。7月末の非常事態宣言以前に、約 1 万 1,500 人の兵力がノルマンディーでの戦闘のためにチャネル諸島を離れた。その後の 11 カ月間に配給削減の直接的影響によりドイツ軍兵士の肉体的なスタミナと全般的健康状態は著しく悪化した。1944 年 10 月時点のドイツ軍守備隊の兵力は 2 万 8,500 人だった<sup>9</sup>。

イギリス政府はチャネル諸島の状況悪化を承知していた。占領初期からボートによる同諸島からの脱出が絶えず発生していた。このような脱出は極めて困難かつ危険なものであったが、1944 年 7 月以降はより頻繁に発生した。極めて貴重な軍事情報がイギリス当局に寄せられた。脱出者には軍隊経験がある者が多く、彼らの報告には大きな信頼性が置かれたためである。9 月 22 日にはイギリス政府はドイツ占領軍の早期降伏を求めたが、占領軍側はガンジー島の海岸沖でイギリス使節と会見することを拒否した。9 月 25 日にフリードリッヒ・ハフマイアー海軍中将が同島軍司令官に任命された。同中将はナチの体制にとって政治的に信頼でき、「降伏するな」というヒトラーの命令を疑うことなく遂行する人物と見なされていた。9 月 27 日、イギリス政府はスイス当局からチャネル諸島の民間人の絶望的な食糧事情について正式な報告を受けた。当時のイギリスの内閣文書の中に「飢えに苦しませればいい。戦闘はしない。勝手にやせ衰えればいい (Let 'em starve. No fighting. They can rot at their leisure)<sup>10</sup>」というウィンストン・チャーチル首相の自筆のメモが発見されている。このコメントはドイツ軍守備隊と降伏を拒否するその頑なな姿勢に向けられたものだろうが、チャネル諸島の民間人もまた飢餓を運命づけられていた<sup>11</sup>。国際法の下でドイツ占領軍は民間人に食糧を提供する責任があった。戦争のこの段階で、イギリス内閣はチャネル諸島を孤立させるという軍事目的と、西欧の非戦闘員に対するより広範な人道的懸念及びいかなる決定もナチの宣伝目的に利用されるという認識の間でバランスを取ろうとしていた。加えて、食糧と船舶はともに極めて乏しい資源であったし、オランダにおける直近の経験はすでにドイツ占領軍が食糧を戦争の武器として利用していることを示していた。9 月にはオラ

<sup>8</sup> H. Smith, *The Changing Face of the Channel Islands Occupation: Record, Memory, Myth*, p. 27.

<sup>9</sup> Charles Cruickshank, *The German Occupation*, (London: Sutton, [1975] 2004), p. 285.

<sup>10</sup> Charles Cruickshank, *The German Occupation of the Channel Islands* (London: Sutton [1975] 2004), p. 284 から引用。

<sup>11</sup> Peter Tabb, *A Peculiar Occupation: New Perspectives on Hitler's Channel Islands* (London: Ian Allen, 2005), p. 159 を参照。

ングのレジスタンス・グループが連合国軍の進撃を支援するための全国鉄道ストライキを組織し、それに対する直接的報復として、ドイツ占領軍は西部諸州への食糧及び燃料の送達を阻んだ。これは「1944-1945 年の飢餓の冬」として知られるようになり、450 万人に影響を及ぼす飢饉が作り出された。オランダにおけるドイツ軍民政当局は 1945 年 4 月、連合国軍による「マンナ」、「チャウハウンド」作戦として知られる食糧投下を容認した。

10月にチャネル諸島のドイツ軍守備隊は民間人が保有しているとうわさされた食糧備蓄の大規模な一斉搜索を開始した。10月下旬にはチャネル諸島の民間人に対する医療の提供が事実上停止し、底を突いていなかったわずかの薬品及び医療品は医師、看護師により入院患者のために配給され、「生死にかかわる」外科手術のみが実施され、それもしばしば麻酔なしで行われた。底を突いていたインシュリンで治療される糖尿病などの慢性疾患を持つチャネル諸島の島民はすでに死亡し、民間人の高齢層では死亡率が上昇し始めていた。ドイツ軍守備隊は、7月下旬のDデイのノルマンディー上陸作戦で負傷したドイツ兵を治療したガンジー、ジャージー両島の地下病院に麻薬を含む医療品の大量在庫を抱えていた。これらの薬品あるいは医療品はまったくチャネル諸島における民間医療スタッフによる利用に供されることはなかった。

「政府」、ドイツ占領軍、イギリス政府及び国際赤十字の間で約4カ月にわたって非常に長い秘密協議と交渉が行われ、11月5日と7日の間に最終的に合意が成立した。ドイツ側は、スイス外交団及び国際赤十字を通じて「政府」が民間人向けの食糧小包及び医療品に限り要請し受け取ること、並びにこれらの物資を運ぶ船舶1隻がチャネル諸島周辺のイギリス軍立入禁止区域を通過することを許可することの2点を承認した。ドイツ軍は、食糧小包その他の人道的支援物資を民間人に分配すること、基礎食糧の配給は続けること、さらにドイツ軍は決して没収や分配プロセスへの介入は行わないことを約束した<sup>12</sup>。

赤十字からの物資の第1回目は1944年12月27日にガンジー島セント・ピーター港、12月30日にジャージー島セント・ヘリアに到着、リスボンから出港した商船SSベガ号が輸送し、国際赤十字代表2人が分配監視のために同乗してきた。SSベガ号には緊急援助物資750トンが積載され、積み荷には石鹼4トン、塩5.2トン、たばこ9万6,000本とともに、医療・外科手術用品、子どもと高齢者向けの栄養補助食品が含まれていた。個々の食糧小包はカナダとニュージーランドで梱包され、紅茶、バター、肉、砂糖、コンデンスミルク、乾燥卵などの缶詰食品が入っていた。SSベガ号は1945年5月31日を最後に、合計6往復した。ドイツ側は赤十字の物資及び小包の神聖さに敬意を払い、ドイツ軍兵士が飢餓状態に近かったにもかかわらず、援助物資の分配に一切介入せず、軍隊として規律を維持

<sup>12</sup> George Forty, *The Channel Islands at War: A German Perspective* (London: Ian Allen, 1999), p. 9.

した。しかし、ドイツ秘密野戦警察隊（German Secret Field Police、しばしばゲシュタポと混同される）がガーンジー、ジャージー両島で一部の小包を消費したほか、ドイツ軍兵士による食糧小包の窃盗が発生したという証拠もある。チャネル諸島島民によるこの時期の記述はドイツ軍兵士の窮状に対する同情を示しているが、限定された配給を共有することは不可能であった。

SS ベガ号の到着により民間人の飢餓は回避されたものの、チャネル諸島は依然としてドイツ占領下で非常事態の中にあり、状況は引き続き悪化した。1945 年 1 月 12 日には電話が止まり、これに続いて 1 月 25 日には電力供給が停止された。共同カフェと市民厨房は食糧供給の不足で 3 月 28 日に閉鎖した。今や赤十字の小包だけが民間人にとって信頼できる食糧源であった。占領が継続する中、ドイツの軍事的敗北のニュースが（チャネル諸島内で違法に保有されていたラジオを通じて）知られるようになったため、極めて緊張した空気の中で占領軍を刺激しないように民間人はそれまで以上に注意深く行動した。3 月、ドイツ軍守備隊は当時連合軍の前線のかなり後方となっていたコタンタン半島西部のグランビルに小規模な奇襲攻撃を仕掛けることまでした<sup>13</sup>。5 月 6 日になってもイギリスから降伏勧告を受けたドイツ占領軍司令官のハフマイアー海軍中將は、上陸に対して抵抗する意思を明らかにし、「チャネル諸島の最高司令官は本国政府からのみ命令を受ける」との放送を行った<sup>14</sup>。

ドイツ軍守備隊はドイツ本国の降伏の翌日である 1945 年 5 月 9 日に降伏した。アルフレッド・スノー准将率いる「ネステグ」作戦の下、イギリス海軍の駆逐艦 2 隻、HMS ブルドッグと HMS ビーグルがガーンジー島セント・ピーター港に入港して占領に終止符を打った。解放軍の主力部隊は 5 月 12 日にチャネル諸島に到着、上陸用舟艇には民間人向けの食糧、医薬品、衣服及び基礎的家庭用品が積み込まれていた。

ドイツ軍守備隊は降伏後に戦争捕虜となり、きちんとした食事を与えられるなど、イギリス軍からジュネーブ協定に基づく全面的な保護を受けた。ドイツ軍兵士の多くが飢餓線上ギリギリの状態にあったことから、兵士への食事提供は医療処置の形となった。しかしながら、イギリス側の取り組みにもかかわらず、1945 年 8 月にドイツ軍兵士 300 人がガーンジー島の病院で治療中に「栄養不良のため死亡した」という当局の記録がある<sup>15</sup>。国際赤十字に

<sup>13</sup> Paul Sanders, *The British Channel Islands under German Occupation 1940-1945* (Jersey: Jersey Heritage Trust, 2005), p. 181.

<sup>14</sup> Barry Turner, *Outpost of Occupation: How the Channel Islands Survived Nazi Rule 1940-45* (London: Aurum, 2010) p. 231 から引用。また Peter Tabb, *A Peculiar Occupation: New Perspectives on Hitler's Channel Islands* (London: Ian Allen, 2005) pp. 163-80 を参照。

<sup>15</sup> Hazel R. Knowles Smith, *The Changing Face of the Channel Islands Occupation: Record, Memory and Myth* (London Palgrave, 2007), p. 139 から引用。

よってチャネル諸島の地域社会に提供された人道的支援の重要性は現在でも記憶されており、同諸島では赤十字は極めて評判のよい慈善機関となっている。

